

R7(2025)年共通テスト追試

『とりかえばや物語』現代語訳



次の文章は、『とりかえばや物語』の一節である。

主人公の女君は女性であることを隠し、男性として宮中で活躍していた。ところが、権中納言(本文では「殿」)にその秘密が見破られ、迫られて契りを結んだ。その後、妊娠した女君は都から離れた宇治に住まわされ、子ども(本文では「若君」)を出産したが、結局、女君は兄弟の助けを借りてひそかに宇治から脱出した。

1 宇治には、若君の御乳母、明くるまで帰リたまは

宇治においては、

若君の乳母が、

夜が明けるまで(女君が)部屋にお戻りに

ねばあやしと思ふに、御格子など参るほどまで見え

ならないので不審だと思ふが、

格子などを

上げ申し上げる時間になっても現れ

たまはず。人々尋ねあやしがりきこゆるに、言はむ方

なさらない。

人々が

捜して

不審に思い申し上げると、

(乳母は)言い表しようが

なくあきれて、思ひ寄るまじきものの隅々などまで

無いほど驚きあきれて、

(他の人が)思いあたるはずのない所の

すみずみなどまで

尋ね求めたてまつるに、いづくにかおはせむ。

探し求め申し上げるけれども、

どこにいらっしゃるだろうか、どこにもいらっしゃらない。

言ふかひなく思ひまどふほどに、殿おはしたるに、

どうしようもなく

途方に暮れているうちに、

権中納言がいらっしゃったので、(乳母が)

かうかうと聞こえさすれば、うち聞きたまふより

「このように(女君が行方不明になりました)」と申し上げると、(権中納言は)少し聞きなさるとすぐに

かきくらし心まどひたまひて、ものもおぼえたまは

悲しみにくれて

思い悩みなさり、

正気も失いなさる。

ず。

「さて、いかなりしことぞ。日ごろいかなるけしき
それにしても、どういうことだったのだ。 ここ数日間、どのような 様子が

か見えたまひし。古里のわたりより訪れ寄る人や
見えなさっていたのか。 (女君の)実家や縁者から 訪ね寄る人はいたのか。」

ありし」と問ひたまふを、

と問いなさるけれども、(女君とその兄弟が会うために協力したことを、権中納言に知らせて

我さへ騒がれぬべければ、乳母もえ申し出でず、
いなかったため)自分までも責め立てられそうなので、乳母も 口に出して申し上げることができず、

「さる御けしきもえ見えはべらず。見たてまつら

「そのような」出奔する」の様子も お見受けできません(でした)。 (女君は権中納言と)お会い申し上げ

せたまふほどはさりげなくて、一ところおはします
なさるときは 何気ない風で(したが)、 お一人でいらっしゃる

ほどは、若君を目も放たず見たてまつらせたまひ
ときは、 若君を 目も離さないで 世話をし申し上げなさり

つつ、うち忍び泣き明かし暮らさせたまひしをば、
つつも、 こっそりと泣いて 夜を明かして 暮らしていらつしたのを(見て)、

世の中に恨めしくもおぼつかなくも思ひきこえ
世の中に 不満に(思いつつも) 気がかりにも 思い申し上げ

させたまふ人やおはしますらむなどこそ、心苦しく
なさる人が いらつしやるのだろうか など(思つて) 気の毒に

見たてまつりはべりしか。かうざまに思しめしなる
拝見しておりました。 このように(出奔しようと)お思いになる

らむ御けしきとつゆも見たてまつらざりき」
ような ご様子だとは 全く気づき申し上げませんでした」

と聞こゆるに、言はむ方なし。

と申し上げるので、

なんとも言いようがない。

2

(かつて男性として宮中に出仕していた頃に女君は)この上なく大切に世話をされているばかりだった身なの

いとかく忍び隠ろへたるさまにて、

(自分＝権中納言は)

あなたざまのことを心に入れて扱ひつつ、

あちらの方「自分との子を出産したばかりの都にいる別の女性」のことを熱心に世話しながらも、

ここにはありもつかず都がちにあくがれたりつるを、
ここ「二字治」には 居つきませず
都にばかり 出かけていたので、

げにいかに見も馴らはずあやしくあいなしと

(女君は)本当にどんなに見ても馴染まず、

不都合で

つまらない(暮らした)と

思しけむを、うち見るにはすべてさりげなく
お思いになっていたろうに、(自分と)ちょっと会うときには、まったく何気なく

やすらかなりし御けしきありさまの、かへすがへす
穏やかだった
表情や 態度が、 繰り返し

見るとも見るとも飽く世なくめでたかりし恋しさ
何度見ても
見飽きることはなく 素晴らしかった
(女君への)恋しさが、

の、やらむ方なく、時のほどに心地もかき乱り、
晴らしようがなく、 少しの時間に 気持ちも 乱れ、

来し方行く末もおぼえず、かなしく堪へがたきに、
過去のことも 未来のことも 考えられず、 悲しくて 我慢できないので、

巡りあひ尋ねあはむことおぼえず、いかにせむと

(いつか)巡り会ったり捜して(再び)会ったりするようなことも考えられず、「どうしようか、いや、どうしようも

かなしきに、若君のかかることやあらむとも知らず
ない」と悲しいのに、
若君のこのようなこと「母の出奔」が あるようなことも わかっていない

顔に何心なき御笑み顔を見るが、限りと
顔で、 無邪気な 笑顔を見ると、

「(若君を見るのもこれが)最後」と

思ひとぢむる世のほだしといとど捨てがたくあはれ
(俗世を)断念する(出家の際の)障害と(なるだろうと) いっそう 捨てるのが難しく、しみじみと

なるにも、あはれ、かかる人を見捨てたまひけむ
愛おしいのにも、 「ああ、 このような人(「若君」)を見捨てなさったような気丈さ(こそが男性として

心強さこそと思へど、あさましく、ことわりは
生きていた女君らしさだ)」と思うけれども、驚き呆れ、 (こうなってしまうことへの)言い訳は

かへすがへすも言ひやる方なく、胸くだけで
本当に 言い尽くしようが無く、 胸がつぶれるほど

くやしくいみじく、人の御つらさも限りなく
後悔して 非常につらく、 (あの)人(「女君」)のつれなさも、 この上なく

思ひ知らる。
思い知らされる。

3 臥したまひし御座所に脱ぎ捨てたまへりし御衣
(女君が)寝ていらつしやった場所に 脱ぎ捨てなさっていた 御召し物

どものとまれるにほひ、ただありし人なるを、
などに 残っている香が、 まったくかつての人(「女君」)の香と同じなので、(権中納言は

引き着て、よよと泣かれたまふ。かばかりのことを
それを)引き被って、 おいおいと 泣かずにはいられない。 これほどのことは

夢に見むだに覚めての名残ゆゆしかるべし、かたち
夢に見るのでさえ、 目覚めたときの 余韻は甚だしくつらいだろう(に)、(まして現実で、女君の)容貌

けはひの言ふ方なく愛敬づきにほひ満ちて、
や雰囲気が 言い表しようのないほど 愛らしく 魅力に満ちており、

憂きもつらきもあはれるも、

(回想すると、女君が)つらいことも、耐えがたいことも、悲しいことも、

(感情を抑えて)

いとにくからず心うつくしげにうち言ひなしたまひ
とても感じが良く

可愛らしい様子で少し仰るように心掛けていらつしやったこと「素晴らしい

し恋しさの、さらにたとへて言はむ方なく、
人柄」への恋しさが(抑えきれず)、まったく喩えようがなく、

胸よりあまる心地して、人のをこがましと
胸がいっぱいな

気持ちがして、

周りの人が見たら「おろかしい」と

見思はむこともたどられず、

思うということも考えることができず、

(幼児が駄々をこねるように)

足摺りといふらむこともしつべく、泣きてもあまる
足摺りということも

してしまいそう(な様子)で、(どんなに)泣いても泣き足りないよう

心地して沈み臥したまひぬる御けしきの、いみじく
な気持ちがして、

気持ちが沈んで横たわってしまいなさった(権中納言の)御様子が、

とても

いとほしくわりなきを、見たてまつり嘆かる。

気の毒で

仕方がないのを、(周囲の人々は)拝見して嘆かずにはいられない。